

ところ絶版ということである。ただ、日本国内で要望する声が高まれば、モンゴルで再版される可能性が高いということであった。モンゴルへの連絡先は次のとおり。Laboratory of Pharmacognosy, Faculty of Biology, National University of Mongolia, Post Office Box-377, Ulaanbaatar-46, Mongolia. Tel & Fax: +976-11-321246. E-mail: bathuu@mobinet.mn.

(門田裕一)

□ケルサン・ノルブ (Norbu K.): **Tibetan Medicinal Plants** 399 pp. 2004. 40元. 西藏人民出版社. ISBN: 7-223-01668-X/R・61.

チベットにおける薬用植物利用の現状を知ろうとして、2004年5月にラサで購入した。本文はチベット語で書かれている。中国語のタイトルは藏医動植物药材標本。カラー写真と原色図を用いた、藏葯の教科書である。著者のノルブ氏は1972年の生まれで、チベット医学の現場で経験を積んでこられた方という。写真と図のクオリティはまちまちではあるが、印刷・紙質ともに出来映えは素晴らしい。評者はチベット語を全く理解できないので、写真と図、学名、中国名のみで判断していることをお断りしておきたい。

印刷はなかなか良いのであるが、あまりにも誤植が多い、というのが第一印象である。単なるミススペルのレベルではなく、例えば、カラー写真がキク科トウヒレン属の「*Saussurea medusa*」なのに、中国名が「条葉銀蓮花」、学名がキンポウゲ科イチリンソウ属の「*Anemone trullifolia*」となっている。単なる校正ミスともいえるが、このような誤りがかなり目立つ。本書の教科書としての性格上、これはかなり問題が大きいと言わざるを得ない。

しかし、チベットにどのような植物があるのか、写真で理解しようとするときには有用な本といえよう。なお、藏葯の教科書であるため、貝殻、ウナギ、ドジョウなど植物以外のものも掲載されている。(門田裕一)

□清水晶子: **ロンドンの小さな博物館** 254 pp. 2003. ¥720. 集英社新書. ISBN: 4-08-720195-3.

別に紹介した「絵でわかる植物の世界」の著者とは同名異人である。ロンドンには大英博物館など大型なもの他に、200あまりの中小博物館があるそうで、その中からグリニッジ天文台、フリーメイソン博物館、インク博物館、シャーロックホームズ博物館など16施設が紹介されている。植物関係としては庭園史博物館、トワイニング紅茶博物館が出ている。前者は17世紀の採集家 Tradescant 父子にちなむもので、設立の由来が面白い。1976年になって、忘れ去られていた彼らの墓が発見され、それをきっかけに篤志家によってイングリッシュガーデンの元祖ともいべき父子を記念するこの博物館が出来たのだそうだ、つぶれた会社の散逸した作品を収集家がい集め、トラストを作って運営しているところがあるかと思うと、原稿を書いているうちに潰れてしまった博物館もあるという。紅茶博物館は、もちろん今も続く会社の本店にある、たった二室の展示である。単なる観光案内ではなく、著者のイギリス文化史の素養に裏付けられた、随筆風の読みでのある文章である。日本でもこういう案内書があると、教育目的の一点張りの博物館のイメージが変わるだろうに。

(金井弘夫)